

○田中実・林田誠剛・松浦正

(長崎果樹試)

【目的】

ハウス栽培モモは、樹勢が強く、新しょうの発生や伸長が旺盛で過繁茂になりやすく、果実肥大や品質が劣ることが多い。開花期に環状剥皮を行うと新しょうの伸長が抑制され、果実肥大の促進に有効であるが剥皮の程度は不明である。そこで開花期の環状剥皮の程度と果実肥大および果実品質への影響について調査した。

【材料および方法】

2本主枝開心形に整枝した無加温栽培の‘日川白鳳’（2006年13年生，2007年14年生）を供試し，開花終期（2006年3月20日，2007年3月17日）に環状剥皮を実施した。剥皮には専用のナイフを用い，保護剤等は塗布せず，そのまま放任した。処理は単年度処理で主枝単位で行い，各区3反復した。

2006年は剥皮幅が枝の直径の10%（10～12mm），5%（5～6mm），2%（2～3mm）幅の区を設定した。

2007年は剥皮幅が枝の直径の10%幅，5%幅の区および5%剥皮処理+パクロブトラゾール水和剤散布区を設定した。パクロブトラゾール水和剤は希釈濃度1000倍で満開3週間後および5週間後に樹冠全体に十分量を散布した。

果実重，果実階級割合および果実糖度は収穫し

た全果実（1区当たり273果～417果）を調査した。果実糖度は非破壊糖度計（㈱ファンテック：FQA-NIRGUN）を用い，果実赤道部1か所を測定した。着色歩合，pHおよび核割れ果率は収穫盛期に適熟で収穫した果実を各区より50果～70果調査した。着色歩合は紅色素が果実全面に着色した割合を10とした0～10段階の指数で調査した。

【結果および考察】

剥皮後のカルス形成は各区とも処理3日後から観察された。癒合するまでの期間は10%幅が3～4週間，5%幅が約2週間，2%幅は約1週間であった（データ略）。

環状剥皮による果実肥大促進の効果は，枝の直径の10%幅が大きく，無処理との間に有意な差が認められた。2%幅では肥大促進の効果はなかった。5%幅の処理と5%幅+パクロブトラゾール処理は果実肥大促進の効果に差がなかった。着色歩合，糖度，pHは各区とも処理による差はなかった。核割れ果は大玉果ほど発生しやすく2L以上の階級で特に多かったが，処理による差は認められなかった。

以上の結果からハウス栽培のモモにおいて開花終期に10%の幅で，環状剥皮を行うことにより果実肥大が促進されることが明らかとなった。

第1表 ハウス栽培モモ日川白鳳の環状剥皮処理と果実重，階級割合および果実品質

剥皮の程度 ² (%)	果実重 (g)	果実階級割合 (%)					着色歩合	糖度 (Brix)	pH	核割れ果率 (%)
		2L以上	L	M	S	2S以下				
2006年										
10	201a ⁷	17.5	30.4	23.1	19.2	9.7	7.1	10.2a	4.38	13.3a
5	187ab	10.1	26.9	24.4	20.4	18.2	6.8	10.1a	4.41	6.7a
2	172b	2.4	16.5	30.1	34.2	16.8	7.3	10.3a	4.44	3.3a
無処理	179b	6.9	20.9	28.4	25.9	17.9	7.4	10.1a	4.42	3.3a
2007年										
10	202a	9.6	38.0	33.1	17.8	1.4	6.5	10.9a	4.19	25.0a
5+パクロブトラゾール	204a	15.4	41.3	17.7	20.7	4.9	5.9	10.9a	4.14	37.8a
5	204a	3.8	47.8	27.6	17.5	3.3	6.9	11.1a	4.18	13.3a
無処理	182b	1.2	33.7	23.5	23.5	10.6	6.8	10.8a	4.29	21.7a

² 処理枝の直径に対する剥皮幅の割合

⁷ 縦の異なる文字間にはTukeyの多重検定で5%レベルで有意差有り。